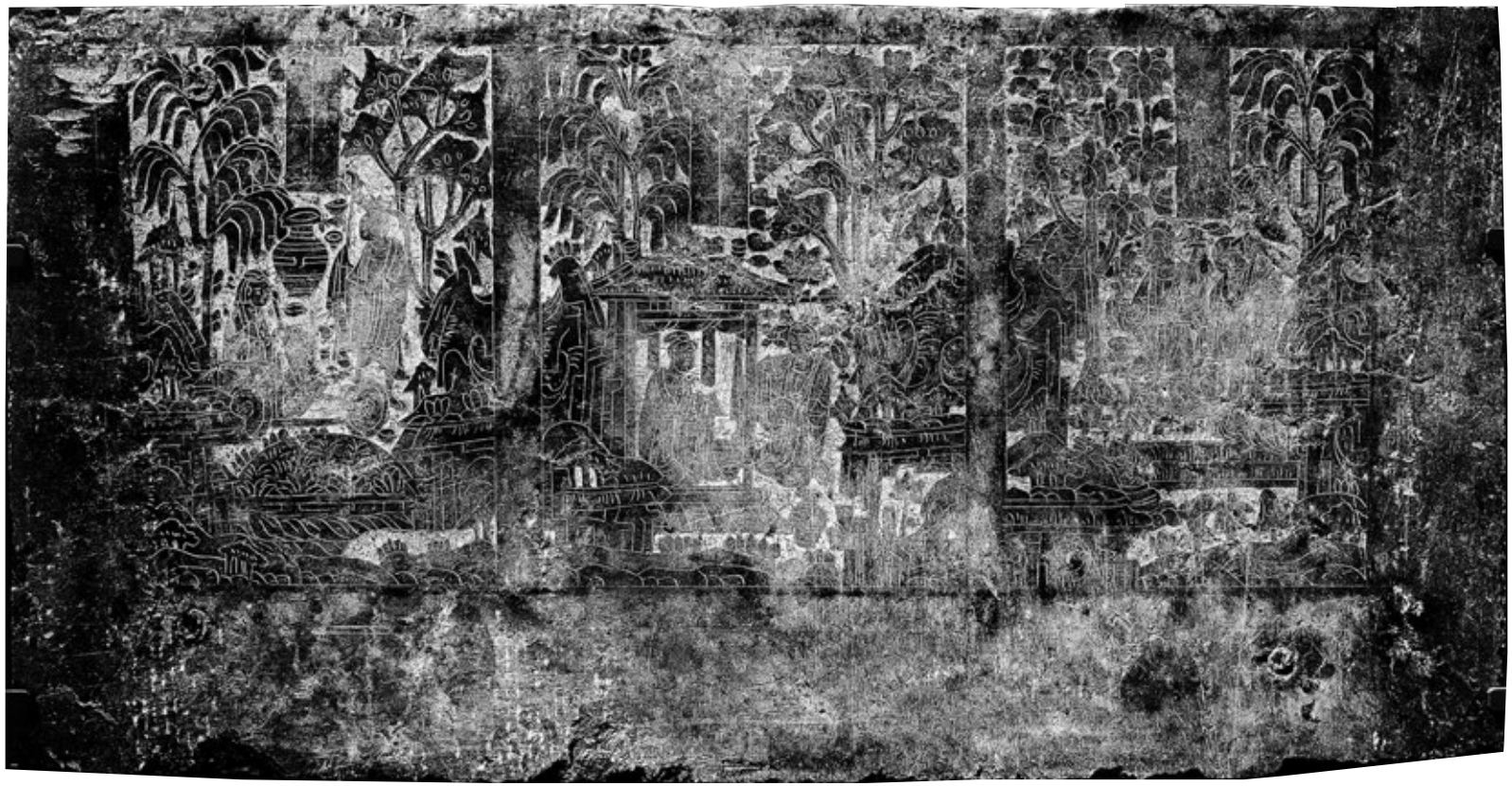
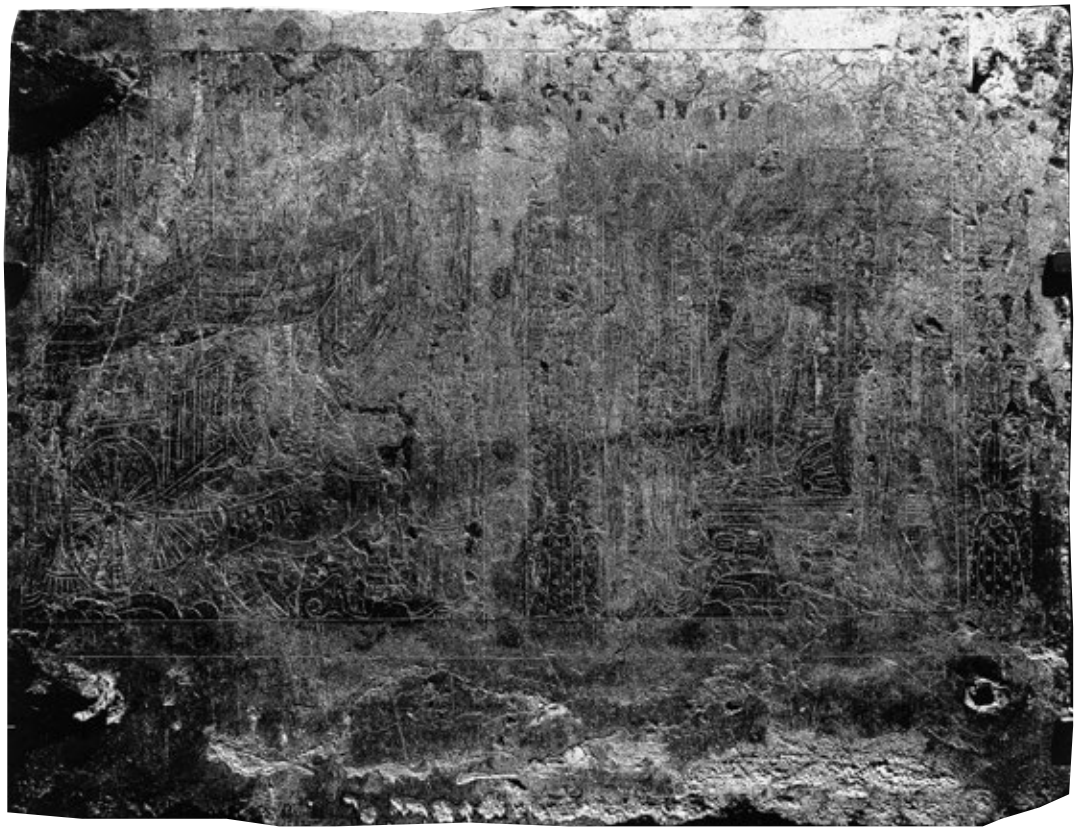
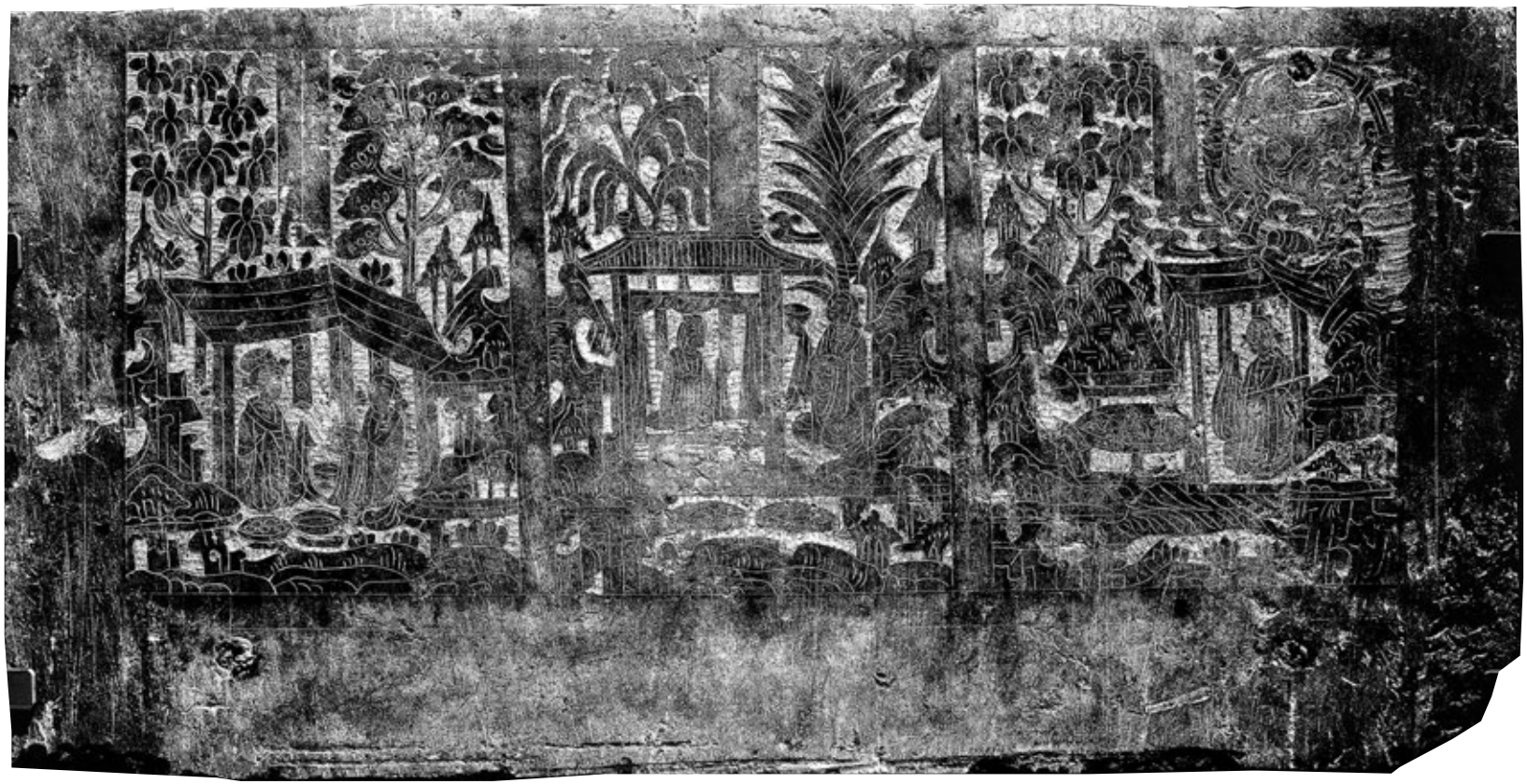


図版一　*呉氏蔵董黯石床B　右側板*

図版二　*呉氏蔵董黯石床B　正面右板*



図版三　*呉氏蔵董黯石床B　正面左板*



図版四　*呉氏蔵董黯石床B　左側板*

論文

呉氏蔵新出董黯石床Bについて

黒田　彰

〔抄　録〕

小稿は、今般新たに出現した、深圳市金石芸術博物館蔵北魏石床を紹介しようとするものである。本石床は、同理事長呉強華氏による苦心の蒐集に掛る、石棺床囲屏四枚と脚部（前脚、後脚）から成るもので、左右の側板二枚に三図ずつ、計六図の孝子伝図が描かれる、貴重な遺品である。その左側板三図が全て、陽明本孝子伝37董黯条に基づく、董黯の図像によって占められている所から、本石床を、董黯石床Bと仮称する。Bは、もう一点の呉氏蔵董黯石床（『佛教大学文学部論集』102に紹介した）に対している。小稿は、その囲屏の全貌を、世界に先駆け紹介しようとするもので、その写真の提供など、呉氏の好意に負う。本遺品の右側板には、郭巨、丁蘭、董永の三図が描かれている。小稿においては、左側板の董黯図に加え、それら三図の孝子伝図について、その図像的な特色を報告する。

キーワード　孝子伝（図）、深圳市金石芸術博物館蔵董黯石床B、郭巨図、丁蘭図、董永図

一

平成二十九（二〇一七）年九月末、深圳市金石芸術博物館を訪れ、新出の北魏時代の孝子伝図石床二点を目睹した。呉強華理事長の好意によるもので、その二点の内、董黯石床と名付ける一点（囲屏四枚に前脚、後脚を伴う）については、拙稿「董黯図攷（二）―呉氏蔵董黯石床の出現―」（『佛教大学文学部論集』102）において、孝子伝図（董黯図）を中心とする囲屏の全画象を既に紹介、報告した。[1] 小稿は、その折の二点の内の、残る一点を紹介しようとするものである。

もう一点の石床遺品は、囲屏四枚に石闕（左右2）、前脚を具える、

北魏時代末期のものと思しい優品で[2]（図一）、左右の側板が後述、孝子伝図で占められる、貴重な学術資料であることは、言を俟たない。巻頭図版一―図版四は、図一の囲屏部分四枚に描かれた図像を示したものだが、その内容を概念図として示せば、図二のようになるであろう。囲屏四枚の法量を示せば、次の通りである。

右側板――縦五七糎、横一一二・一糎、厚七・八糎
正面右板――五七・三、一一四・四、八・二
正面左板――五八、七五・三、八・八
左側板――五六・二、一一〇・八、七・八

右の法量の幅（横）を見ると、両側板及び、正面右板の三枚が一一〇糎余であるのに対し（図版一、図版二、図版四）、正面左板のみは、七五・三糎と、著しく狭いことが看て取れる（図版三）。それは、正面左板が一画面少ないためである。即ち、本石床の囲屏一枚は、三画面ずつに劃される筈の所、正面右板だけ、二画面（牛と女性墓主）にしか劃されていない（図二）。従って、正面から見た本石床の両端は、馬と牛となり、さらにその内側に男性墓主と女性墓主像が来て、中央は庖厨図が占めることになる（図二）。そのため、本石床は、正面右板の幅が長く、左板が短いという、聊か変則的な形状を有しているが、同様の例は、シカゴ美術館蔵北魏石床に見ることが出来る（呉強華氏教示）。

さて、本石床の両側板、各三画面には、全て孝子伝図が描かれている。六画面全ての孝子伝図、画面中央上部には、二行分の榜が配されているが、文字を読み取ることは出来ない。まず右側板には右から5

図一　呉氏蔵董黯石床B

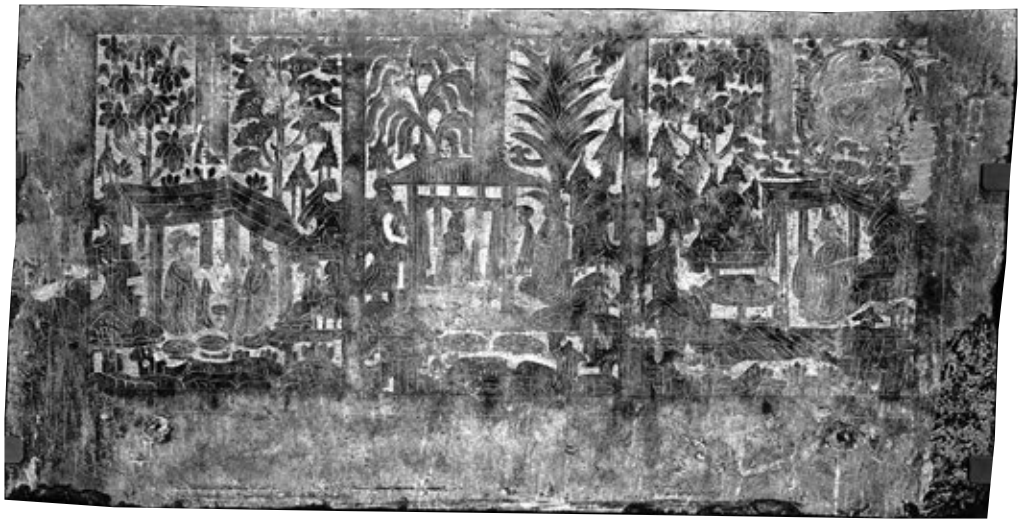
牛	女性墓主	庖厨	男性墓主	馬
37董黯③				2董永
37董黯②				9丁蘭
37董黯①				5郭巨

図二　董黯石床Ｂの内容

郭巨、9丁蘭、2董永図が描かれる（数字は、陽明本孝子伝の目録番号）。また、左側板に見えるのは、37董黯図(A)(B)(C)の三図に外ならない。図三は、本石床の左側に描かれた董黯図(A)(B)(C)を示したものである。[3] 図三の董黯図(A)(B)(C)は、先に紹介した呉氏蔵董黯石床に描かれる、董黯図(A)(B)(C)と全く同じ場面を表わしたものと考えられる。特に図三の(C)は、董黯石床(C)と非常に深い関係を有している。図四は、董黯石床の董黯図(C)を掲げたものである。図四は、⑤黯の墓参（大団円）を描いたもので、図三(C)、ネルソン・アトキンス美術館蔵北斉石床のそれと共に目下、三図しか伝存の確認出来ない、極めて珍しい図像となっている。取り分け図四は、

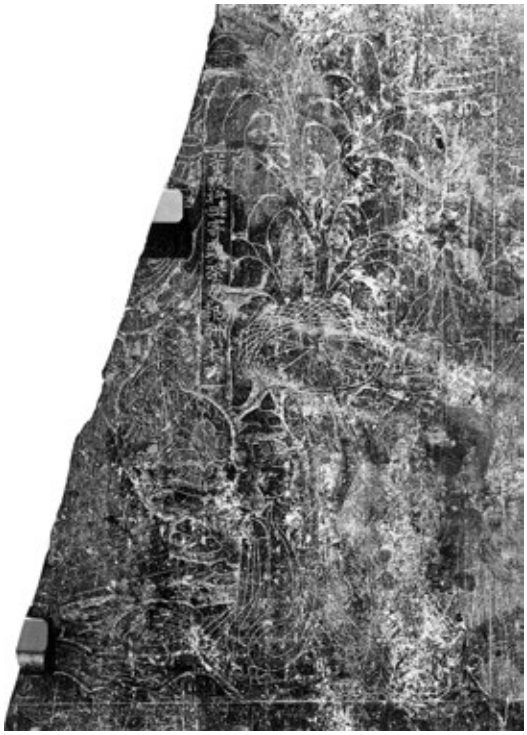
董黯(黯)将二王寄(奇)頭一祭レ母報酬末時

という題記が、北魏期における黯の墓参（大団円）場面の存在を確証する、大変重要な資料である点、先に論じた如くであり、加えて、図三(C)は、図四と全く同じ構図を有する上、11蔡順図に由来すると考えられる、雷神の図（図四左上、図三(C)右上）までもが共有される点、本石床の董黯図は、董黯石床のそれとの非常に深い関連が顕著であるとしなければならない。[4] そこで、本石床の董黯図と董黯石床との密接な関係に鑑み、本石床を、呉氏蔵董黯石床Ｂと仮称することにしたのである。ともあれ、本石床の董黯図（図三）と呉氏蔵董黯石床のそれとの関連に関しては、上記拙稿において述べたので、そちらに譲り、ここでは、本石床の図像を紹介するに留めたい。図五は、本石床左側板の董黯図(A)(B)を示したものである。まず両図には、董黯の家（(A)）、王奇の家が描かれている。これは、例えば陽明本孝子伝37董黯条の冒



(A)　(B)　(C)

図三　董黯石床Ｂ左側板（董黯）



図四　呉氏蔵董黯石床（董黯図Ｃ）

頭に、

董黯家貧至孝。雖与二王奇一並居……

と記される叙述を忠実に場面化したもので、図五が言わば董黯図の構図設定における定型であることは、それがボストン美術館蔵北魏石室、ネルソン・アトキンズ美術館蔵北斉石床などの董黯図にも見られることから、証明されよう。(A)の屋内に坐するのは、董黯の母、(B)の屋内に坐するのは、王奇の母である（共に右向き）。黯母が若々しく和やかに、対する奇母が年老いて険しい表情に描かれているのは、陽明本に、

〔黯母〕年過二七十一、家又貧。顔色怡悦……〔奇母〕家雖二富食一魚又嗜レ饌……枯悴

(A)　(B)

図五　董黯図（A）（B）

等とある記述を反映したものである。(A)の黯母の右に跪き、両手で食器を捧げるのは、董黯、(B)の屋外に跪き、右手で食器を捧げるのは、王奇である（共に左向き）。痩身の董黯に対し（A）、(B)の王奇が肥身に描かれるのは（腹も出ている）、王奇の横柄な人格を表わしている。両画面下の盆器に盛られた食物を見ても、(A)が少量で小さく（盆器も小振りで、右のそれは空である）、(B)が大量で大きいのは（盆も大振り）、やはり黯家が貧しく、奇家の富んでいることを表わし、黯家が仮屋風で、奇家がきちんとした家屋に描き分けられていることなども、同様に考えられる。図五の(A)(B)が董黯図の研究史上、重要なのは、(B)の王奇の家に三牲が描き加えられていない点である（三牲は、後揚図六の(C)の墓前に見える）。このことは、図五(A)(B)が前引陽明本孝子伝冒頭の叙述に基づく、貧しい董黯の家と金持の王奇の家とが並び建っていたという、

①黯の家、奇の家（プロローグ）

を内容とする、董黯図における冒頭場面の原初形態を留める図像に外ならないことを示している。すると、図五(A)(B)と全く同様の構図を有しながら、王奇の家に三牲を添えるボストン美術館蔵北魏石室やネルソン・アトキンズ美術館蔵北斉石床などのそれは（但し、前者のそれは、三牲ではない可能性がある）、本来は①の場面である筈の奇の家に、三牲を描き加えることにより、①の奇の家の場面に、

④三牲強要

を重ね合わせ、④の場面をも兼ねさせていることが判明するのである。このことは、場面の数が厳しく制約される、北魏時代の孝子伝図にお

ける、描画上の工夫として、十分にあり得ることである。すると、例えば董黯図中の三牲に着目するならば、④三牲強要の場面として独立的に描かれる図像（⑷呉氏蔵北魏石床、⑸呉氏蔵翟門生石床、⑹ヴァージニア美術館蔵北魏石床）の他、④の三牲は、本石床のⒸの如く、⑤黯の墓参（大円団）の場面（後掲図六参照）や、ボストン美術館蔵北魏石床、ネルソン・アトキンズ美術館蔵北斉石床、呉氏蔵董黯石床の如く、①奇の家（プロローグ）の場面へと、自在に移動を繰り返していることが確認されるのである。この点は、董黯図研究史における本石床の画期的な学術価値を示すものとして、今後注目すべきであろう。図六は、本石床の董黯図Ⓒを掲げたものである。図六は、⑤黯の墓参（大円団）の場面を描く。図六の右には、まず図五Ⓐと同じ仮屋風の建物が描かれるが、董黯の喪屋であろう。建物の中に跪くのが董黯で（左向き）、董黯が右手の袖を上げるのは、母が亡くなったことへの嘆きを表わしている。画面左に描かれるのは、黯母の塚であり、墓前に供え物の置かれること、画面右上に雷神の描き加えられることは、図四呉氏蔵董黯石床（董黯図Ⓒ）と全く同じである（図四には、一匹の虎も見える）。その雷神（虎）が11蔡順図に由来しようことは、先に触れた如くであるが、問題は、図六における墓前の供え物が三牲となっていることである。この三牲こそは、図六が11蔡順図ではなく、董黯図であることを示す明徴として、極めて重要なものであると同時に、墓前の供え物は、図四に見る如く本来、王奇の首でなければならないことに、注意しなければならない。換言すれば、⑤黯の墓参（大団円）の場面としての図六に、④三牲強要の三牲を描くことは、間違いと言うべきであり、即ち、図六の誤りとすべきなのだが、それが必ずしも誤りとのみ断じ切れないのは前述、董黯図における三牲というものが、元来の④三牲強要の場面の他の諸場面間を、移動させられ得るものだからである。このような点などを含め、本石床の董黯図（図三）が、呉氏蔵董黯石床のそれと共に、今後の董黯図研究にとって看過し得ない、重要な研究史的位置を占めようことは、言を俟つまい。

図六　董黯図（C）

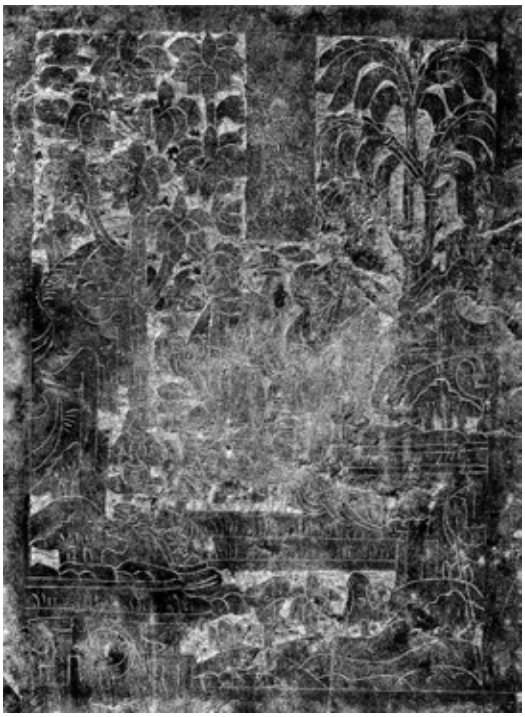
二

董黯石床Bの左側板には、董黯図ⒶⒷⒸが描かれているのに対し（図五、図六）、右側板の方には、右から5郭巨、9丁蘭、2董永と

いう三図の孝子伝図が描かれる。図七は、本石床右側板右の5郭巨図を示したものである。本図の基となった、陽明本孝子伝5郭巨の本文を示せば、次の通りである。

郭巨者、家貧養母河内人也。時年荒。夫妻昼夜懃作、以供二養母一。其婦忽然生二一男子一。便共議言、今養二此児一、則廃二母供事一。仍掘(堀)レ地埋レ之。忽得二金一釜一。々上題云、黄金一釜、天賜二郭巨一。於レ是遂致二富貴一、転レ孝蒸々。賛曰、孝子郭巨、純孝至真。夫妻同レ心、殺レ子養レ親。天賜二黄金一、遂感二明神一。善哉孝子、富貴栄レ身

郭巨の物語は北魏時代、大変人気があり、残された郭巨図の数も多い。目下、管見に入った郭巨図としては、以下の遺品十九点を上げることが出来る。



図七　郭巨図

(1)江蘇徐州仏山画象石墓
(2)寧夏固原北魏墓漆棺画
(3)ミネアポリス美術館蔵北魏石棺
(4)和泉市久保惣記念美術館蔵北魏石床
(5)ネルソン・アトキンズ美術館蔵北魏石棺
(6)C.T.Loo 旧蔵北魏石床
(7)洛陽古代芸術館蔵北魏石床
(8)ネルソン・アトキンズ美術館蔵北斉石床
(9)鄧県彩色画象甎
(10)襄陽賈家沖画象甎
(11)陝西歴史博物館蔵三彩四孝塔式缶
(12)呉氏蔵北魏石床
(13)呉氏蔵北魏石床脚部
(14)呉氏蔵翟門生石床
(15)ヴァージニア美術館蔵北魏石床
(16)安陽固岸東魏石床
(17)襄陽清水溝M1南朝墓画象甎
(18)襄陽柿庄M15南朝墓画象甎
(19)呉氏蔵北魏崑崙石床

上記十九点の郭巨図の内、近時における郭巨図の研究の急速な進展を齎したのは、(12)以下の呉氏蔵遺品を中心とする、八点の図像である。特に(12)呉氏蔵北魏石床こそは、平成二十四（二〇一二）年三月に、私が呉氏と出会うきっかけとなった、思い出深いもので、(12)はまた、北

魏期の孝子伝図における、陽明本孝子伝本文の直接的引用というものを、始めて確認し得る、学術的価値に富んだ遺品である[5]（拙稿「呉強華氏蔵新出北魏石床について―陽明本孝子伝の引用―」〈『京都語文』24所収〉参照）。さらに貴重なのが、⒀呉氏蔵北魏石床脚部で、石床脚部に孝子伝図の見出だされた、始めての例であることに加え、その孝子伝図は、全てが郭巨の図像で占められ、場面の総数は、何と六場面にも及んでいた。⒀はまた、三角形の山型の区切りなど、四（三）場面を有する、⑵寧夏固原北魏墓漆棺画のそれとも、深い関連を有するが（⑷和泉市久保惣記念美術館蔵北魏石床のそれも三連図）、その六つの場面とは、左のようなものである[6]（拙稿「郭巨図攷―呉強華氏蔵北魏石床脚部の孝子伝図について―」〈『佛教大学文学部論集』98所収〉参照）。

①供養（プロローグ）
②道行
③穴掘り、黄金
④運搬
⑤供養（大団円1）
⑥官の黄金返還（大団円2）

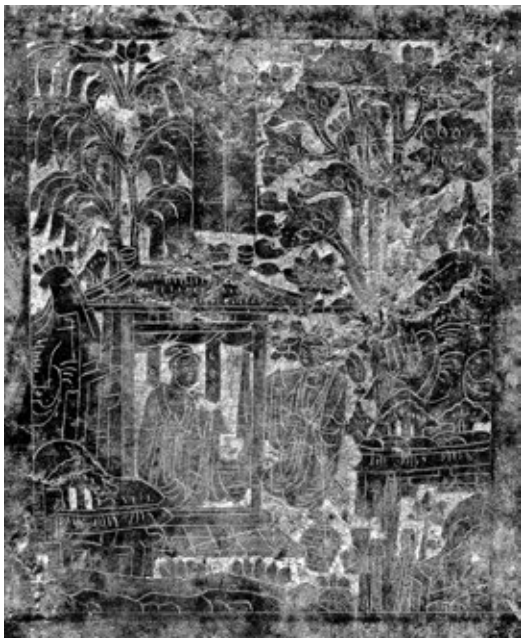
上記⑴―⒆の郭巨図遺品は、その①―⑥のいずれかの場面を有することになるが、本石床の郭巨図図七は、③穴掘り、黄金の場面を描いたものである。図七左下に、合掌して胡坐するのは、郭巨の子供である（右向き）。その右に立つのが郭巨及び、妻である（共に左向き）。郭巨は、両手に臿（すき）を握り（右手の袖を捲（まく）り上げる）、右足を臿に掛けている。臿の右下には、黄金の釜が見える。郭巨の妻が右手に団扇を持って、それを顔の左へ掲げるのは、子供の生き埋めを見まいとする仕草であろうか。或いは、黄金の釜が出現したことで、隠した顔を披いた所かもしれない。図七に描かれた、③穴掘り、黄金の場面は、郭巨図の代表とすべきもので、殆どの遺品に含まれる画象だが、図七同様、③穴掘り、黄金のみを郭巨図の画象とするものに、⑴、⑺、⑻、⑼、⒂、⒄、⒅などがある。上記十九例の郭巨図遺品の内、⑿呉氏蔵北魏石床以下の八例の図像が、比較的近時に出現を見た郭巨図である。中で、⑿また、⒀呉氏蔵北魏石床脚部のそれは、既述の二拙稿に紹介した外、⒁以下の諸図については、拙稿「呉氏蔵東魏武定元年翟門生石床について―翟門生石床の孝子伝図―」三、四章において[7]、

⒁呉氏蔵翟門生石床――図九
⒂ヴァージニア美術館蔵北魏石床――図十
⒃安陽固岸東魏石床――図十四
⒄襄陽清水溝M1南朝墓画象甎――図十一2
⒅襄陽柿庄M15南朝墓画象甎――図十一3
⒆呉氏蔵北魏崑崙石床――図十八

等として掲出しておいたので、それらの参照を乞いたい。

図八は、本石床右側板の中央に描かれた、9丁蘭図を示したものである。本図の基となった陽明本孝子伝9丁蘭条の本文を示せば、次の通りである。

河内人丁蘭者至孝也。幼[a]失レ母、年至二十五一、思慕不レ已。乃剋レ木為レ母、而供二養之一如下事二生母一不上異。蘭婦不孝、以レ火焼二木母



図八　丁蘭図

面。蘭即夜夢語二木母一。言、汝婦焼二吾面一。蘭乃笞二治其婦一、然後遣レ之。有b隣人借レ斧。蘭即啓二木母一。々顔色不レ悦。便不レ借レ之。隣人瞋恨而去。伺二蘭不在一、以レ刀斫二木母一臂一。流血満レ地。蘭還見レ之、悲号叫慟、即往斬二隣人頭一以祭レ母。官不レ問レ罪、加二禄位其身一。賛曰、丁蘭至孝、少喪二亡親一。追慕无レ及、立二木母人一。朝夕供養、過二於事レ親（生親）。身没名在、万世惟真

丁蘭図も漢代以来、非常に人気のあった孝子伝図の一つで、本図（図八）を除き、これまで管見に入った丁蘭図としては、以下の十九図が上げられる。

(1)後漢武氏祠画象石（武梁祠）
(2)　同　　（前石室13石）
(3)　同　　（左石室８石）
(4)和林格爾後漢壁画墓
(5)孝堂山下後漢小石室画象石
(6)開封白沙鎮出土後漢画象石
(7)後漢楽浪彩篋
(8)泰安大汶口後漢画象石
(9)寧夏固原北魏墓漆棺画
(10)ミネアポリス美術館蔵北魏石棺
(11)和泉市久保惣記念美術館蔵北魏石床
(12)ボストン美術館蔵北魏石室
(13)C.T.Loo 旧蔵北魏石床
(14)洛陽古代芸術館蔵北魏石床
(15)襄陽賈家沖南朝画象甎
(16)ネルソン・アトキンズ美術館蔵北斉石床
(17)呉氏蔵北魏石床（三面）
(18)安陽固岸東魏石床
(19)ヴァージニア美術館蔵北魏石床

上記十九例の内、1―8が漢代の遺品となっており、9以下、本図を含む十二図が六朝時代の遺品に該当している。本図は、上掲陽明本孝子伝本文におけるa、

〔丁蘭〕幼失レ母、年至二十五一、思慕不レ已。乃剋レ木為レ母、而供二養之一如下事二生母一不ㄘ異

と記される部分を、図像化したものである。図八は、画面左に、一軒

の家屋が描かれ、その屋内に、一人の女性が坐している（右向き）。それが丁蘭の作った木母である。母の右の屋外に跪く一人の男性が丁蘭である（左向き）。丁蘭は、右手の袖を上げるのに対し、母は、両袖を上げており、両者は、恰も何かを話し合っている風情である。上掲の十九例の郭巨図の内、比較的近時に知られるに至ったのは、⑰、⑱、⑲の三図であるが、⑰を紹介した拙稿「蔡順、丁蘭、韓伯瑜図攷―呉氏蔵北魏石床（二面）の連れの出現―」（関西大学『国文学』101所収）三章において、[8]⑰を含め、

⑰呉氏蔵北魏石床（三面）――図十二
⑱安陽固岸東魏石床――図十五、十六（題記）
⑲ヴァージニア美術館蔵北魏石床――図十七

として掲出しておいたので、それらの参照を乞いたい。特に⑱安陽固岸東魏石床のそれは、

孝子丁蘭
隣人往礼

と記す二行の題記を有し、当図像は、上引陽明本孝子伝9丁蘭条本文における、b以下の隣人の件を描いたもので、(1)後漢武氏祠画象石（武梁祠）の題記に、

隣人仮レ物、報乃借与

とも見える場面に該当するが、北魏時代の丁蘭図中に絶えてその例を見ない、珍しい図像であることに、注意する必要がある。[9]

三

図九は、本石床右側板左の董永図を掲げたものである。本図の基づいた陽明本孝子伝2董永の本文を示せば、次の通りである。

楚人董(薫)永至孝也。少失レ母、独与レ父居。貧窮困苦、傭賃供二養其父一。常以二鹿車一載レ父、自随二着陰涼樹下一。一鋤一廻、顧二望父顔色一。供養蒸々、夙夜不レ懈。父後寿終、无レ銭不二葬送一。乃詣二主人一、自売(買)為レ奴、取二銭十千一。葬送礼已畢。還二売主家一、道逢二一女人一。求レ為二永妻一。永問レ之曰、何所二能為一。女答曰、吾一日能織二絹十疋一。於レ是、共到二売主家一。十日便得レ織二絹百疋一。用レ之自贖。々畢、共辞二主人一去。女出レ門語レ永曰、吾是天神之女。感二子至孝一、助レ

図九　董永図

還二売身一。不レ得二久為二君妻一也。便穏不レ見。故孝経曰、孝悌之志、通二於神明一。此之謂也。賛曰、董永至孝、売レ身葬レ父。事畢无レ銭、天神妻レ女。織レ絹還レ売、不レ得二久処一。至孝通レ霊、信哉斯語也

董永図も漢代に引き続き、人気を博した孝子伝図の一つであって目下、管見に入った董永図は、以下の二十一図に及ぶ。

(1)後漢武氏祠画象石（武梁祠）
(2)和林格爾後漢壁画墓
(3)泰安大汶口後漢画象石墓
(4)中岳漢三闕啓母西闕
(5)渠県蒲家湾無名闕
(6)楽山柿子湾Ⅰ区1号墓
(7)渠県蒲家湾無名闕
(8)江蘇徐州仏山画象石墓
(9)ネルソン・アトキンズ美術館蔵北魏石棺
(10)ボストン美術館蔵北魏石室
(11)C.T.Loo 旧蔵北魏石床
(12)ネルソン・アトキンズ美術館蔵北斉石床
(13)陝西歴史博物館蔵三彩四孝塔式缶
(14)楽山麻浩Ⅰ区1号墓
(15)楽山麻浩Ⅱ区40号墓
(16)楽山柿子湾Ⅱ区22号墓
(17)済南長清大街1号墓
(18)臨沂呉白荘画象石
(19)呉氏蔵翟門生石床
(20)ヴァージニア美術館蔵北魏石床
(21)華厦石刻博物館蔵北魏石床（二面）

上記(1)―(21)の内、(1)―(8)、(14)―(18)が後漢、(9)―(12)と(19)(20)(21)が北魏、(13)が唐のものとなっている。[10] 本図は、陽明本孝子伝本文の、

常以二鹿車一載レ父、自随二着陰涼樹下一。一鋤一廻、顧二望父顔色一。供養蒸々、夙夜不レ懈

とある場面を描く。画面左の木の下に、三輪車に坐すのが、父である（右向き）。父は、左手で杖を突く。その右に立つのが、董永である（左向き）。董永が右手に鋤を握り、両脛を露わとするのは、彼が農作業中であることを示している。父と董永との間に、大きな壷が見えるのは、父の糧食を入れたものだろう（(20)ヴァージニア美術館蔵北魏石床の董永図にも壷が見えている）。

最後に近時、管見に入った上記、(14)、(15)、(18)、(21)の董永図四図を紹介しておく。図十は、四川楽山麻浩Ⅰ区1号墓、図十一は、楽山柿子湾Ⅱ区40号墓の董黯図を示したものである。[11] 図十一は、画面の左に、左端の樹の下で鹿車（独輪車）に乗る父（右向き）、画面の右に、耕作する董永を描く（左向き）。樹の枝には糧食の容器が掛かり、父は、杖、董永は、左手に鋤を握っている。図十も、傷んではいるが、樹、鹿車、父の形が残り、図十一と同じ構図のものだろう。図十二は、臨沂市博物館蔵臨沂呉白荘後漢画象石墓、前室東過梁西面右の董永図を掲げたものである。[12] 画面右の大樹の下に（枝に糧食の容器が掛かる）、鹿車に乗る父（左向き）、画面左に、耕作する董永を描く（左向き）。

図十　楽山麻浩Ⅰ区１号墓（董永）

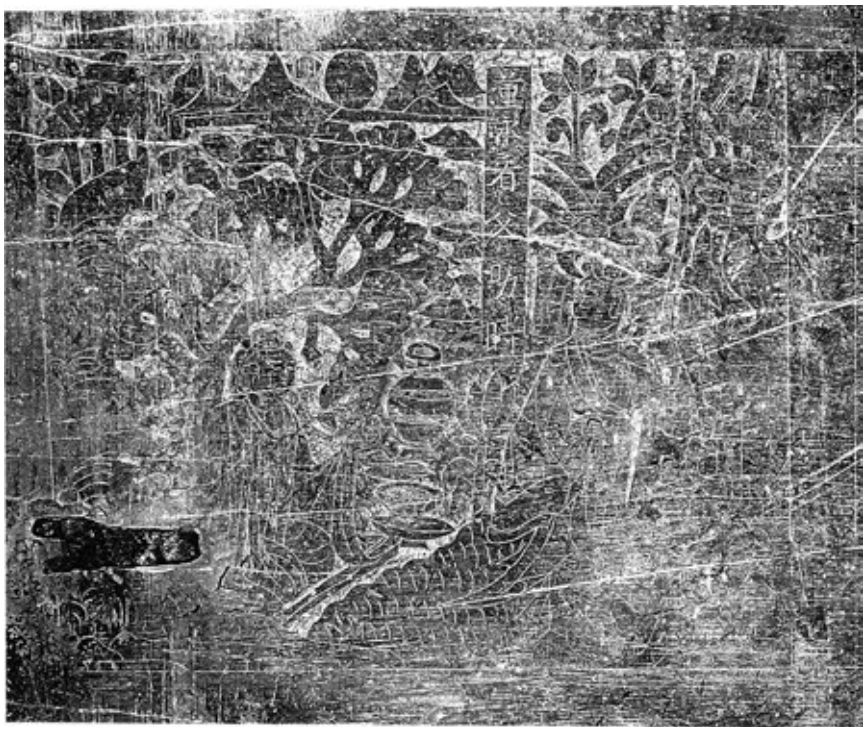
図十一　楽山柿子湾Ⅱ区40号墓（董永）

父は、鳩杖を両手に持って左の肩に掛け、董永は、両手で鋤を握って父の方を振り返っているが、この動作こそ陽明本に、「一鋤一廻、顧二望父顔色一」（船橋本「一鋤一顧、見二父顔色一」）と記される部分を、表現したものに外ならない。図十二において特徴的なのは、冠を被った董永の両袖や父の両袖などが宙に翻ることで、同じような描写が、沂南北寨後漢墓中室の列士図に見える。図十三は、陝西省宝鶏市の華厦石刻博物館蔵北魏石床（二面）、左側板左に描かれた董永図を示したものである。[13] 画面の上方やや右寄りに、

董永看父助時

という題記が記される（助は、鋤の宛字）。この題記も、先に触れた陽明本の本文に基づくものである。画面左、大きな銀杏の樹の下で、

図十二　臨沂呉白荘後漢画象石墓（董永）



図十三　華厦石刻博物館蔵北魏石床（二面。董永）

独座に坐るのが、父である（右向き）。董永図に特有の車は、見当たらない。画面右、左手に握った鋤を立て、父の方を顧るのが、董永である（右向き）。二人の間には、例の壺等が描かれている。

漢代から六朝期に掛けての董永の物語をめぐっては、種々の議論がある。それは、孝子伝本文研究の立場から見れば、例えば前掲の陽明本孝子伝2董永条とはまた、別の董永物語を仮定することである。そして、その一つのきっかけとなっているのが、漢代以降の孝子伝図資料に散見する、董永とその父以外の登場――女性とか子供とか――であることに着目したい。今般紹介した四つの董永図には、それらの人物が一切、登場していない（⒇も同じ）。このことは、陽明本孝子伝2董永条が、六朝期の物語の形を示すものであり、さらにそれが漢代へも溯る、証左であるように思われる。陽明本より古い、孝子伝等の文献資料は、管見に入らないからである。[14] 肖貴田氏が始めて報告された、⒄済南長清大街1号墓の董永図などの実地調査を通じ、その問題はまた、機会を改めて考えてみたい。

〔注〕

(1) 拙稿「董黯図攷(二)―呉氏蔵董黯石床の出現―」（『佛教大学文学部論集』102、平成30年3月）

(2) 図一は、呉氏提供の写真に拠る。

(3) 図三は、呉氏提供の写真（図版一―図版四と共に黎明舎主、立松洋行氏撮影）に拠る。以下も同じ。

(4) 注(1)前掲拙稿参照。

(5) ⑿呉氏蔵北魏石床の郭巨図については、拙稿「呉強華氏蔵新出北魏石床について―陽明本孝子伝の引用―」（『京都語文』24、平成28年11月。

なお趙超、呉強華氏『永遠的北朝　深圳博物館北朝石刻芸術展』〈文物出版社、二〇一六年〉に、拙稿の黄盼盼氏による中国語訳が収められる）を参照されたい。

(6)拙稿「郭巨図攷―呉強華氏蔵北魏石床脚部の孝子伝図について―」（『佛教大学文学部論集』98、平成26年3月）

(7)拙稿「呉氏蔵東魏武定元年翟門生石床について―翟門生石床の孝子伝図―」（『佛教大学文学部論集』101、平成29年3月）。なおその後、

⒇北朝芸術博物館蔵北魏石床脚部

に描かれた郭巨図（四図）が出現し、小稿等における①―⑥の場面認定を改めた。詳しくは拙稿「北朝芸術博物館蔵の郭巨董黯石脚―呉氏蔵郭巨石脚との関連―」（『京都語文』26、平成30年11月）を参照されたい。また、⒆の墓主、翟門生がソグド人であることは、拙稿「翟門生覚書―呉氏蔵東魏武定元年翟門生石床について―」（『京都語文』25、平成29年11月）において論じた（その二章後半及び、三章の中国語版が、「翟門生粟特人身份考―以薩甫為中心」として、中国社会科学院文学研究所『多維視野下的中日文学研究』〈社会科学出版社、二〇一八年〉117―127頁に収載、公刊された）。

(8)拙稿「蔡順、丁蘭、韓伯瑜図攷―呉氏蔵北魏石床（二面）の連れの一面の出現―」（関西大学『国文学』101、平成29年3月）

(9)注(8)前掲拙稿及び、その注(28)参照。

(10)⒁―⒃は、唐長寿氏「楽山崖墓画像中的孝子図釈読」（『長江文明』5、二〇一〇年6月）による。⒄、⒅は肖貴田氏「漢至南北時期董永故事及其図像的嬗変」（『東方考古』7、二〇一二年12月）による。なお⒆と⒇については、注(7)前掲拙稿図版七また、図二十四と図二十五を参照されたい。

(11)図十は、二〇一六年八月に私の撮影した写真、図十一は、唐長寿氏注(10)前掲論文図一に拠る。

(12)図十二は、二〇一五年八月、私が撮影した写真に拠る（立松洋行氏が見易くしてくれた）。なお肖貴田氏注(10)前掲論文及び、その図八参照。

(13)図十三は、華厦石刻博物館提供の写真に拠る。

(14)このことについては、注(7)前掲拙稿五を参照されたい。

〔付記〕

小稿は、深圳市金石芸術博物館による北朝文化研究事業の一環であり、呉強華理事長の御高配に心から御礼申し上げたい。

（くろだ　あきら　日本文学科）

二〇一八年十月十日受理